

特 集 | 「東日本大震災 10 年～被災資料と向き合って～」

「令和 2 年度 文化財保存修復を目指す人のための実践コース～リモート配信の取り組み～」

「地域社会における自治体と保存修復家の連携」

特定非営利活動法人
文化財保存支援機構



NPO JCP NEWS

36

2021.6.30

高田松原津波復興祈念公園 国営追悼・祈念施設 献花の場 （岩手県陸前高田市）



令和3年度定例総会を開催

JCP の令和 3 年度定例総会は、昨年度に引き続き感染リスクを下げるため電磁的決裁にて行われました。

本報告では、令和2年度決算、事業報告、令和3年度予算、事業計画および役員改選・会員動向をお伝えいたします。

開催日時：令和3年6月24日(木)

表決方法：電子メールによる電磁的決裁及び議長、議事録署名人同席による議事録作成

回答者：維持会員 16 名の内

出席:2名、電磁的表決:5名、委任状:5名

議事次第

維持会員 16 名中、上記 12 名が出席と見做され、定足数を満たしたため、定款 25 条に基づき総会は成立。

第1号議案) 令和2年度決算報告

令和2年度決算報告は下記のとおり。

【收入】

・受取会費	¥ 2,930,000
・受取寄付金	¥ 162,993
・受取助成金	¥ 7,460,980
・事業収入	¥ 126,102,032
・その他収入計	¥ 1,322,301
当期収入計	¥ 137,978,306
前期繰越金	¥ 40,829,443
総 計	¥ 178,807,749

【支出】

・一般管理費支出	¥ 17,006,256
(家賃、人件費、旅費、通信費、消耗品費等)	
・事業支出計	¥ 102,984,072
・その他支出計	¥ 4,493,600
当期支出計	¥ 124,483,928
次期繰越金	¥ 54,323,821
総計	¥ 178,807,749

※震災寄付金特別会計については、令和2年度は個人4件、法人1件、その他1件から合計163,183円の寄付が寄せられました。内、長野市博物館の支援などで98,122円を使わせていただきました。現在残高は587,265円となっております。豪雨をはじめ毎年のように各地で災害が頻発しております。引き続き暖かいご支援をよろしくお願い申し上げます。

第2号議案) 令和2年度事業報告

①文化財の保存技術の研究開発 本部 1 件
②文化財保存修理専門家の養成、研修事業
本部 1 件、関西支部 1 件、九州支部 2 件
③災害救援活動 本部 7 件、関西支部 1 件
④その他 本部 6 件、九州支部 1 件

第3号議案) 令和3年度事業計画(案)/予算(案)

①文化財の保存技術の研究開発 本部 1 件
②文化財保存修理専門家の養成、研修事業
本部 1 件、九州支部 3 件
③災害救援活動 本部 6 件
④その他 本部 6 件、九州支部 1 件

予算案

【收入】

・一般会計収入計 (会費、寄付等)	¥8,581,500
・事業収入計	¥139,012,087
当期収入	¥147,593,587
前期繰越収支差額	¥54,323,821
総 計	¥201,917,408

【支出】

・一般管理費支出計	¥21,038,901
・事業支出計	¥123,576,374
・消費税	¥2,702,200
・法人税、住民税、事業税等	¥4,493,600
今期支出計	¥151,811,075
次期繰越金	¥50,106,333
総 計	¥201,917,408

第4号議案) 役員改選について

現役員の任期満了に伴い、理事 7 名、監事 1 名が継続承認。澤田正昭理事 1 名が辞任。新たな理事として東京藝術大学教授の北野珠子氏が新理事として承認されました。

澤田理事におかれましてはJCP発足時から長きにわたり大変お世話になりました。改めて感謝申し上げますとともに、今後のご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

報告) 会員の動向

5月末日現在 300 件の登録があります。令和 2 年度の入会 23 件、退会 32 件。傾向としては学生会員が減少する一方、登録会員は微増しています。SNS などを活用した積極的な広報活動に努め、会員の拡大につなげていきたいと思っています。

以上

東日本大震災と NPOJCP の 10 年

～陸前高田市立博物館被災資料と共に～

八木 三香 (NPOJCP 事務局長)

今年 2021 年は、東日本大震災発生から 10 年の、節目の年にあたります。

2011 年 3 月 11 日、マグニチュード 9 の地震が東北、北関東を襲い、10m を超える津波により多くの人命が奪われました。あれから 10 年、通常であれば各地で追悼行事が大々的に開催され、日本全国の人々が震災の記憶を新たにすると所でした。ところが足掛け 2 年続くコロナ禍の中、今年の 3 月 11 日はいつの間にか過ぎてしまった観があります。発災当時は「未曾有」と言われた大災害でしたが、被災された方々を置き去りに、一般社会の記憶は風化が進んでいるように思われてなりません。殊に当時子供であった 10 代 20 代の若者にとっては、もはや歴史上の出来事なのではないでしょうか。近年では毎年のように災害が起きています。こうした環境の変化も、過去を上書きするスピードを加速していると言えましょう。

NPOJCP は、発災から間もなく国の救援委員会委員であった東京国立博物館の橋渡しで、陸前高田市立博物館のレスキュー活動に参画しました。以来今日まで、同館被災資料の安定化処理に携わっています。

陸前高田市立博物館は、昭和 34 年、岩手県初の総合博物館として設立されました。郷土の優れた博物学者 鳥羽源蔵、千葉蘭児のコレクションをはじめとして、自然史資料、民俗資料（特に漁労用具）、文書、美術資料、写真まで、約 56 万点の収蔵品がありましたが、津波によって被災し、全壊しました。しかし 46 万点の資料がかりうじてレスキューされ、日本全国の文化財関連機

関によって現在も安定化処理が進められています。

実は筆者は 10 年前、被災地の惨状を目の当たりにして、「今『文化財』をやっているいいのだろうか？」という思いにとらわれたことがあります。その後も安全な場所で被災資料を相手に活動が続けながら、この行為がどのように仮設住宅の人々に届くのだろうか？と、忸怩たる思いを禁じ得ませんでした。しかし今、このコロナ禍が、人間にとっての「文化」の重要性を浮き彫りにしてくれているように思います。不要不急として制限されている祭り、観光、スポーツ、展覧会、コンサート、映画、そして外食（酒！）…これらは皆「文化」の所管です。禁じられて初めて文化活動がいかに生活の中で大きな割合を占めているか、誰もが再認識しているのではないのでしょうか？そして今私たちは、いかにこれらに^{かつ}餓えていることでしょうか。文化活動のない社会はあり得ません。「文化」はあたかも食事や睡眠と同様、人間にとって必要不可欠^{エッセンシャル}なのです。

しかしながら、一度視野から遠のいた文化の痕跡は、社会の変化の中で砂のように流れ去っていきます。その痕跡を拾い集め、背負ってくれるのが被災資料なのかもしれません。

NPOJCP は今、2019 年に台風で被災した川崎市市民ミュージアムの資料のレスキューと修理も引き受けています。延命処置を施されたモノたちは、確かに存在した文化の記憶を、これからも語ってくれることでしょう。先人の生きた証を未来へ手渡すべく、JCP の会員は今日もカビや泥、埃、塩害と格闘しています。



高田松原津波復興祈念公園に立つ奇跡の一本松



着々と工事が進む新たな陸前高田市立博物館

被災資料を修復しての感想

油 彩 画

西原紀恵さん： 陸前高田市と川崎市では水害にあった被災資料という点では共通していますが、海水と雨水という異なった点で作品に与える影響や損傷が微妙に違うことは実際に修理して感じたことでした。カビによる損傷も海水に比べて雨水の被害は甚大でした。また、レスキューと本格修理ではそれぞれに異なった目的があり、多種多様な問題の中でレスキューから本格修理へとつなげる難しさも実感しました。



新調木枠への張り込み

本保知彩さん： 昨年度の陸前高田市の作品は2m×3mと非常に大型で、工房内での作品の取り回しに苦労しました。支持体であるキャンバスの伸縮もあり、被災の影響かなと思いました。

中右恵理子さん： 津波の被害を受けた油彩画は、作品によって被害の程度に大きな違いがありました。材料や制作技法なども影響するように思います。海水による被災作品は温湿度変化によるキャンバスの動きが非常に大きいと感じました。キャンバスは湿度の影響を受けやすいので、支持体の伸縮には海水に含まれる塩分が関係しているのかなと思います。

金澤夕香さん： 津波で被災した絵画は、地塗層や目止め層がかなり脆弱になっていること、ワニス層の一部に白濁が見られることなど、いくつかの特徴が挙げられます。これらは川崎市の油彩画にも共通しているように感じました。こうした点は必ずしも作品の外観からすぐに分かるわけではなく、継続的に修復に関わることで実感した貴重なことです。

西原紀恵さん： 油彩画も洋紙も見た目以上に損傷を受けており、溶解しやすくなった絵具層や脆弱化した支持体の処置に苦労しました。洋紙作品は海水の脱塩のために何度もテストを重ね、油彩画では絵具層の除泥や接着などに紙修復で用いられる材料を使用することもあります。分野を超えて様々な材料や方法を探っていくことも今後の課題であると感じています。

金澤夕香さん： 作品の美観を回復する処置に関しては、どこまで直すのか？も課題となります。被災の痕跡を残すとしても、どの程度残すのか。技術者間の意見交換を経て所蔵者のご意向のもと、処置します。「直そうと思えば直せるが、外観上完璧には直さないこともあり得る」ということです。被災して脆弱になった作品への負担をなるべくかけないようにすることも考慮しながら判断されます。

中右恵理子さん： 水害による油彩画作品の被害は、伸縮性の大きな支持体と伸縮性の小さな地塗層や絵具層という層構造によるところが大きいと感じます。水分が急激に入ったことにより、特に支持体と地塗層の間に負荷がかかり、支持体の伸縮が大きかった部分は地塗層に劣化が目立ちます。地塗層が非常に脆くなった結果、絵具層の接着強化も難しくなるということが多いです。（また、支持体が温湿度の変化を受けて伸縮しやすいため、修理後も温湿度が管理された環境での保管が非常に重要になってくると感じます。

被

JCP の活動を通

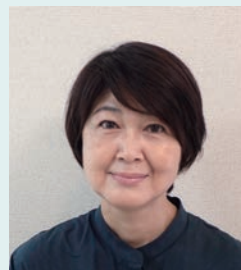


中右恵理子さん(西洋絵画保存修復)

被災作品のレスキュー活動（特に初期）では、自分の専門外の資料のレスキューにあたることも多く、参加している方々も様々な分野の方がいて学ぶことが多くありました。今後も分野をまたいだ情報交換の機会が得られればありがたいです。

金澤夕香さん(油彩画修復)

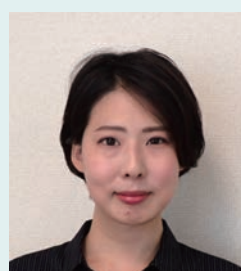
被災文化財の修復に携わる貴重な機会を得た者として、そこから学び、経験したことを今後活かす責務があると思っています。情報交換を広く行うことで、被災文化財のより良い未来へと繋ぐことができればよいのでは、と思っています。



西原紀恵さん(紙・油彩画修復、

【所属】西原絵画保存修復工房)

被災作品の修理では処置前後の分析や様々な材料の調達が必要になってきます。分析会社との交渉や材料の購入など、全体の動きをスムーズに進めてくださり感謝しています。



本保知彩さん(油彩画修復)

昨年のセミナーオンライン配信は、動画を止めながらメモを行うなど繰り返し視聴可能なこと、自分の予定に合わせて受講できるのは便利でした。オンラインだと様々な状況の人が都合に合わせて見られるメリットがありました。

被災資料を修復しての感想

佐藤夕紀さん： 今回の近代紙作品の水損被害は、紙の種類が一つではないうえ、カビの被害も様々で、軽度な作品から重症な作品まで混在していました。紙力の低下が著しい状態のものもあったりと損傷状態が多様なため、処置の工程をひとつ決定することも通常のようにはいかないような状況でした。その中で多くの方々の協力やアドバイスをいただいたおかげもあり、ここまでこぎつけたと思います。そういう意味でも貴重な経験をさせていただきましたが、自分の勉強不足も痛感いたしました。

加藤陽子さん： 日頃関わる修理作品とは損傷状況があまりにも違うため、作品を工房で預かってからの作業初動における様々な対処は、経験者の方々から学ぶことが非常に多かったと感じています。いろいろな専門分野からの経験値と知恵が不可欠であると強く思いました。



肌裏紙除去

被災資料修復の 難しさ・課題

桐原瑛奈さん： 近代日本画は材料・素材ともに様々なものが使用されていて、劣化と被災が合わさった損傷状態でした。初めて目にするようなことが起きており、その中で処置の判断を下さなければいけなかったのが難しかったです。

山田祐子さん： 近代日本画によく見られるような、雲肌麻紙に厚く絵具が塗りこめられた作品が水害に遭うことで、想像以上のダメージを受けることを実感しました。また、作家の技術や技法により損傷状態に大きな差がありました。絵具の剥落だけでなく紙の層間剥離が著しく発生していたことが今回の被災作品の特徴のひとつだと思います。

加藤陽子さん： 「方法」や「処置」の見極めや、限度の大切さと難しさを改めて感じました。特に量的な問題もあり、チームとしての稼働性と個々の修復技術者の知識や力量を最大限に活用できる作業環境も必要であると考えます。そのためには、事業の担当責任者の責務によるところが大きいと思われますが、今回参加した作業においては、模索しながらもリーダーと事務局のおかげで無事に遂行できたと感謝しています。

しての感想・ご意見



加藤陽子さん（目黒黄鶴堂所属）
有意義で貴重な経験の機会をいただき、大変感謝しております。若い方からも色々なことを学ばせて頂きました。この世界、技術も考え方も日進月歩ですのでホントに良い刺激になりました。



山田祐子さん（東洋絵画修復）
専門のちがう会員と知恵を出しあって処置に取り組むことができるので、多角的なアプローチができて良かったです。



佐藤夕紀さん（紙作品修復）
JCP がレスキューの受け皿になってくれて良かったと思いました。色々な人が情報をキャッチし参加することで、専門分野が違う様々な人と交流を持てたのはとても良かったです。



桐原瑛奈さん（東洋絵画修復）
バックグラウンドが様々なメンバーが集まって取り組むことで、難しい場面に直面しても乗り越えられたことです。これはJCPの醍醐味だと思います！

実測図を描くにあたり、漁撈用具は見たことのないものが多く、使用方法を調べるところから始めます。使用者からの聞き取りや参考文献を調べながら、使用方法を理解し、図にします。そうすることで重要な部分を図の中で表せ、細かな痕跡を追うことができます。

被災民具に関しては、救出後に様々な処理が施され、修復されている箇所があるので、そこを見極めながら描き進めます。どこでどのように修復されたか担当者に確認したり、実際に漁師さんや船大工さんが博物館に来て修復されている現場を見学したりもしました。

実測図はそのものを細かく写し取り、再現が可能な領域を目指しますが、制作手法まで見極めるのは困難です。判別できない素材や判読できない文字も多いので、確定できないものは疑問形で記載しています。たくさんの疑問に行き当たりながらも、1つの民具からどこでどんな人がどのように使用していたかということに想いを馳せるのが楽しいです。

JCPを通して、現地で様々な分野の技術を持った方達と出逢います。その方達の作業を見ていて感じたのは、民具実測の世界はテクノロジカルな進歩が遅いということです。今まで抱いていた疑問も技術があれば解決できるなと思うことが多々あります。今回の事業で実測図を含め様々な情報を元に3Dの漁網データが出来、一歩前進したのではないのでしょうか。予算との兼ね合いもあるでしょうが、新しい技術の導入によって実測図が未来へつながる活用方法を見出せることができるようになると嬉しいです。

金井 佐和子 (アーティスト名：カナイサワコ)

武蔵野美術大学大学院彫刻コース修了。民具学会会員。民具実測を行う傍ら、デザイナー、アートディレクター、現代美術作家として活動している。また、拠点である前橋でアートスペース Maebashi Works を運営し代表を務める。



カッコ船実測



2014年6月はじめて陸前高田に行った。それから、1ヶ月ほどの滞在という形で毎年、陸前高田市立博物館に収蔵されている物を図化するために行かせて頂いている。この物は、2011年3月11日の東日本大震災の津波によって流され、救い出された物達だ。それら被災した様々な物を、博物館の方々が日々1点1点丁寧に清掃・修理・保管している。僕らはその中の主に漁撈用具を、民具実測図という方法を用いて図化している。この民具実測図とは、物を把握・同定・修復・復元・比較・普及するための資料として存在する。民具という物は1点だけを抽出して何かを語るのではなく、ある事柄

にまつわる様々な多くの物を1つの群として扱う事で、その物々が存在していた世界を表出させる。民具実測図は、物達を1つの群として捉え束ね散逸させないために存在し、群を形成する全ての物をまずは把握・同定するための資料として作図される必要がある。1つの群の中から個別に選び、それだけを特別に作図するという事には違和感を感じる。陸前高田市立博物館に収蔵されている物は全て、本当に特別な思いと共に大切に扱われていると感じている。

佐塚 真啓 o9o2i3b874b.com

株式会社佐塚商事奥多摩美術研究所 所長 bbbbbb.jp



佐塚さん作業

2011年3月11日 東日本大震災発生

2011

2011年4月21日
東日本大震災募金を開始
(NPOJCP 被災文化財救援募金
として現在も継続中)

2011年5月
文化財 ER 事業

2011年7月
東日本大震災救援委員会(当時)
の要請により東京国立博物館と共
に、津波で被災した岩手県陸前高
田市立博物館収蔵資料の救援活動
を行う

2011年秋
東日本大震災救援委員会の予算に
より奥州埋蔵文化財センターにお
いて「拓本」の安定化処置開始

2012

2012年1月8日
文化財保存支援機構主催シンポジウム
「今、文化財が社会にできること」

2012年度
NPOJCP と東京国立博物館の共
催による文化財保存修復専門家
養成実践セミナーの一環として
「陸前高田学校」開講
(～2016年度)

「拓本軸装」抜本修復保管管理業務開始
(～2016年度)

2013

被災資料の修復方針検討・技術開発が東京国立博物館
で開始

以降、東博の技術開発情報を基本としてJCPの会員が
修復事業を行う

2014

2014年4月25～26日
第2回シンポジウム
「今、文化財が社会にできること」Ⅱ

2014年度
「地籍図」現状調査及び応急措置
「書跡」抜本修復業務開始
(～2016年度)
「民俗資料」専門的整理作業業務
(実測図作成) 開始(～現在)
「水彩画・版画/アクリル画・油彩画」
抜本修復業務開始(～現在)

2016年4月16日 熊本地震発生

2016

陸前高田市立
博物館所蔵

「絵図資料」修理業務開始
(～2018年度)
「地籍図」安定化処理及び
修理業務開始(～現在)

宮城県亘理町被災資料「江戸清吉コレクション短冊帖」
修理業務開始(～2020年度)

2017

「写真資料」安定化処理及び修理業務開始
(～現在)

熊本地震で被災した文化財の応急処置・整理につ
いて作業支援を行う(～2018年度)

2019

2019年10月12日
台風19号により多摩川が氾濫。
川崎市市民ミュージアムの収蔵庫
が浸水

2019年10月13日
台風19号により千曲川の堤防が
一部決壊。地域の被災資料が長野
市立博物館へ運び込まれる

2019年11月
川崎市市民ミュージアム被災資料
の救出・保存修理開始(～現在)
※4,5頁をご参照下さい

2020

長野市の市民ボランティア団体へ講師を派遣し地域
の文化財レスキュー方法を講義

地域社会における自治体と保存修復家の連携

地域の文化財や美術館博物館の資料が被災した際、重要なのは自治体と保存修復専門家の速やかな連携です。行政と民間の協働と言い替えてもいいでしょう。その必要性は以前から指摘されていましたが、実現できている事例は多くはありません。

「特集Ⅱ」では、その数少ない事例として登録会員2名の活動をご紹介します。ひとりは大分県で装潢の工房を営みながら、自治体との連携を模索している首藤弘樹さん、もうおひとりは台風で被災した川崎市市民ミュージアムや千曲川決壊で被災した長野市の資料レスキューに関わってきた絵画書跡修復家の尾立和則さん（2020年度「文化財保存修復を目指す人のための実践コース」講師）です。首藤さんは地方の未指定品の状況に長く心を寄せており、今回寄稿という形で現状を報告してくださいました。

平時の危機管理と非常時の心構え、文化財を守るためにはいずれも大切です。お二人の活動と想いをお伝えいたします。

地域社会における自治体と保存修復専門家の連携について（1）

首藤 弘樹（首藤内装（文弘堂） 副代表／NPOJCP 登録会員）

皆様、こんにちは。私は大分県佐伯市という人口七万人弱の、宮崎県との県境に位置する所に住んでいる、装潢技術者の首藤弘樹と申します。

今、私が一番危惧しているのは、地方自治体の所有する作品、県や市の指定品など未来に残さなければいけない作品の劣化が進んでいる状況です。東京や京都などでは、人材が揃っていて、国宝や国の重要文化財などは予算も十分に頂け、国宝修理装潢師連盟※¹の方々が関係して修理が行われている事と思いますが、地方自治体では連盟の方々にお願いできるほどの予算は十分ではない様です。しかし、地方の作品をこのままに置いて良いのかと私は思い、自治体の学芸員さんと共に修理を進めています。もちろん、古糊などの伝統材料を使用します。私の接する方々や学芸員さんには、表具屋（経師）を信用しないで下さい、私を信用しないで下さいと始め

に伝えます。すると、何を信用すれば良いのですか、と尋ねられます。まず、表具屋に聞いてみてください。「糊は何を使っていますか？」「和紙は誰が漉いたものですか？」「水は？」と、その質問に即座に答えられない時は、信用しないで下さいと言っています。糊、和紙、水が修理修復した作品に与える影響（フォクシング他）の説明もします。私は国宝修理装潢師連盟の工房に10年居た訳ではないので連盟の技師試験は受けられませんが、国宝や国の重要文化財よりも地方自治体の指定品などの修理をしていきたいので、私にとってはもってこいだと…。予算面でも厳しいですが、今、日本の現状を見ると、地方自治体の作品の修理を行わざるを得ない、いや是非させて頂きたいと思っています。

佐伯市の学芸員の甲斐玄洋さんには、私の工房（首藤文弘堂：土地230坪、建物鉄筋コンクリート1F、2F130坪の2F部分65坪）において、裂取りなどは過去の物と違和感が生じない様に取り合わせ、糊、和紙、水などのチェックを行い、私がごまかさないう様に目を光らせて頂き、ある意味の緊張感を保ちながら修理を進めています。地方がゆえに行き詰った時には文化財保存修復学会の先輩の方々や、愛知県立芸術大学で修復を教えている脇屋助作さんに尋ねたり、熊本の装潢師富永憲太郎さんや、アメリカにいた装潢師の伊藤京一さんとお話をさせて頂いたりネットワークを大事にしています。ピンセットは日本一のコレクターの大林賢太郎さん※²にお願いしています。尾立和則さん※³も一度、お見えになりました。過去に唐招提寺の第八十八世西山



ご子息の首藤真典さん
表具に使用する小麦粉澱粉糊を炊いているところ



モンゴルの方々に説明をする首藤弘樹さん（右端）

明彦長老を連れて来られた脇屋さんとは、もう十年以上前に一緒に糊炊きをした仲で、よくうちに来られます。

工房には、大分県教育委員の方や、フィレンツェのオペラ歌手、茶道を私も30年以上している関係で韓国の茶人（絵画の大学教授含む）26名、京都在住の日本画家の斎藤和先生など様々な方に来訪して頂いています。以前、文化財保存修復専門家養成実践セミナー（NPOJCP 主催、東京国立博物館共催）と一緒に参加していた大分県立歴史博物館の元職員で学芸員の石川優生さんが、モンゴルの国立博物館3ヶ所から修復家を4名連れて見学に来られたこともあります。いろんな方々のネットワークのおかげで、地方でも出来る事をしております。

庭にある渋柿で柿渋を作ったり、四国の方から雁皮と楮の苗を送って頂いて育てたりもしています。雁皮は枯らしてしまいましたが楮は恐ろしく大きく成りました。ミツマタは、元々うちに有りました。なぜ苗を、と思われるかもしれませんが、それは、工房に来た学芸員さん達に実際の材料の説明をするためです。今の楮はヒメコウゾと梶の木のかげ合わせです。育った葉を見ると、その意味もわかります。そもそも自分自身が修復家として使用する和紙の元々の姿を知っておくことは、大事なのではないかと思います。

また、絹本の虫喰いの修理には、日本ではまだ放射線劣化絹を使用しているのでしょうか？私は海外の方に紫外線劣化絹を作って頂き、穴うめには自然劣化と同じ絹を使用しています。絹の専門家の中には、放射線劣化の絹はもはや絹ではないと言われる方もいるそうなので…。

紙本の穴うめ、特に墨などの欠落した所には、人が書いた墨の部分を使用する方も居ると聞きますが、それでは他者の作品に成るので、私は画仙紙、和紙などを墨で染めた物でうめるようにしています。この材料は、いつでも除去出来ます。オリジナルの部分はハッキリと分かる様にしています。自分

勝手に作業を進めるのではなく、確かな目を持つ方々のサポート並びに連携プレーで、学芸員さん達にも指導して頂きながら、微力ですが私の出来る事を、父、私、息子そしてスタッフ共々行っている状況です。

厚生労働省の「ものづくりマイスター」にもなっていて、地域の小学校にも小さな屏風や衝立の作り方などを教えに行っています。未来ある子供達にもものづくりの楽しさを伝えるのも大事なのではないかと思います。文化財を修理する為の後継者の問題も大きいと思います。襖、屏風、額、衝立などの骨下地を作成する方々、和紙を伝統的な手法で漉く方々、その他、諸々の職方…。日本は資源のない国で、技術力で世界に貢献していかなければいけないのではないのかと、日本の端で思うのであります。

日本における地方自治体との連携プレーの一例として、私の行っていることが参考になれば幸いです。各地方の助けを待つ保存すべき作品が、より良い方向に進む事を祈念致します。私の工房に興味がある方は、どうぞ、いらしてください。

※佐伯は、日本一魚の種類が水揚げされる港があります（魚しかありませんが）。世界に一冊しかない元版の本も佐伯にはあります。

地方の作品、保存の為に…。

合掌

※1 一般社団法人 国宝修理装演師連盟

主に日本・アジア地域における美術工芸品のうち「絵画」「書跡・典籍」「古文書」「歴史資料」といった装演文化財を対象とし、国宝・重要文化財をはじめとする貴重な文化財の保存修理を専門的に行っている技術者集団。1995年 国の選定保存技術保持団体として認定される。

※2 大林 賢太郎さん 京都芸術大学教授 / NPOJCP 副理事長

※3 尾立 和則さん 絵画書跡修復家 / NPOJCP 登録会員 次頁参照

首藤 弘樹さんプロフィール

- ・1996・1999年厚生労働省技能グランプリ敢闘賞受賞
- ・2014年ものづくりマイスター取得
- ・2019年グッドスキルマーク認定
- ・一般社団法人 文化財保存修復学会会員

首藤内装（文弘堂）

〒876-0807

大分県佐伯市田の浦町5-15

TEL：0972-22-5823

URL：<http://shuto-naiso>



地域社会における自治体と保存修復専門家の連携について（2）

尾立 和則（NPOJCP 登録会員／絵画書跡修復家）

2019年の台風19号では、千曲川の堤防が一部決壊し大きな洪水被害をもたらしました。被災した地域から多くの水損資料が長野市立博物館に運び込まれました。地域の歴史を調査研究し、資料の保存を専門とする文化施設であっても、災害発生後の資料保全活動を直ちに始められるかといえば、そうはいかない現実があります。施設自体が被災していたり、職員が被災し本務に復帰できないこともあり得ます。そもそも災害時に民間に所在する資料を保全することが業務として位置づけられていなければ、たとえ職員に救助したいという気持ちがあっても、公務としては動くことができないのです。そんな状況下で活動しているのが市民ボランティアです。

長野市のケースでは、10月13日に堤防が決壊し、市の職員は住民の避難など人命保護のための行動を優先します。翌日14日には文化財の被災情報が集まってきます。外部の歴史系研究者の団体から支援の申し出も入ります。16日に特に被害が大きかった長沼地区の被害状況調査、18日に長野市教育委員会において協議が行われ、19日には長野市としてレスキュー活動が始まります。被害発生から5日間で態勢を整えたわけです。その時の市の書類において、レスキュー活動は「浸水地域における被災文化財（未指定を含む）の救出活動」と位置付けられました。「未指定を含む」という文言があることで、民間の資料も救助することができるようになったのです。

博物館に運び込まれた被災資料は、まず写真撮影と損傷状態の記録を取り、カビが発生している箇所への応急的な殺菌消毒作業も同時に行われました。次に、市民ボランティアが洗浄の作業をします。レスキュー活動を担当する職員と、被災資料を運び込む場所を確保することで、10月後半には本格的な活動が始まりました。市主導のレスキュー活動が、たった1週間余りで始まったことは特筆すべき事柄だと思います。

また、長野市立博物館では一般ボランティアを公募して「ながはくパートナー文化財保存グループ」を立ち上げました。そしてボランティアリーダー養成のために、専門的な知識、技術指導を外部レスキュー団体に要請し、そこから派遣された専門家が市民グループの指導をするという形をとりました。市民グループが専門家によって技術指導を受け、実際に保存処置作業

に携わったことにより、その技術は現地に残されることになります。やがて次の災害が起こった時、同じ地域内だけではなく、地域外のレスキュー活動にもそういった方々が活躍できる、そんなことを期待しています。

私はコロナ禍が始まる前の2020年1月から新しい試みを始めていました。離れた地域間で、リモートで本の簡単な修理を行ったのです。指導した相手は修理が全く初めての経験でしたが、画像と声で技術的な指導をすることで本の修理は終わり、その効果は確認されました。長野のボランティアリーダーたちにも、濡れて固着した冊子の展開作業をリモートで技術指導しました。映像と声を通した技術指導によって、約2時間の作業で見事に固着した冊子の展開ができました。その時に学んだ技術は、彼らの経験と一緒に現地に残せたことになります。いつ専門家が現地に来てくれるかわからず応急処置が進まない、そういった被災地現場で起こる不都合はリモート指導で解消できるような気がしています。

レスキュー活動から得た知識や技術は同じ地域、あるいは周辺地域で発生する様々な災害への実践が可能となります。学ぶ側から教える側の人材として育てば、被災した現地での早い対応も可能となります。現在、長野市では、多種多様な資料への応急保存処置は博物館職員の管理のもと、市民ボランティアを中心に組織された作業班が行っています。作業に必要な場所や用具は館が整え、より専門的な知識や技術が必要となる処置には外部からの支援を積極的に受け入れています。その経験は、作業に従事した市民とともに地域のノウハウとなり、同時に他地域で発生する災害への有益な情報となるでしょう。市民ボランティアによる活動が、こういった技術の継承につながっていることも知っていただきたいと思います。さらに言えば、市民ボランティアの役割の中心にそういった考え方を据えていただきたいと思います。



本 葉梨絵 (NPOJCP 事務局員)



SNS 開設の背景

SNS 開設の大きなきっかけは、気軽に情報をアップできる媒体が欲しいなと思ったことです。既に HP やブログ、ニュースレターのように情報発信はいくつかありましたが、いずれもその特性上スピード感をもって発信できないのが少々窮屈に感じていました。普段まわりの技術者の方々から「これが代用できるよ」「これが良かったよ」など、修復道具についての情報を聞く機会が多く、こういったプチ情報も修復に限らず様々な現場で応用してもらえたら…と考えました。

また、学生から 30 代前半の年齢層の会員が少ないことも一つです。「文化財の修復」がメディアで取り上げられる割に、関連機関の発信は硬いものが多く、JCP 含め若年層への目にとまる機会や発信力が弱いのも遠因では？と思い至りました。自分に置き換えてみても HP がヒットするまで検索するより、SNS などの媒体を使って探す頻度が多く、気軽さが利点だと感じています。コストをかけずに、まず、少しでも若い人の目にとまる機会を増やす！それを目標に早速やってみよう！という勢いでスタートを切りました。

Instagram と Facebook

インスタグラムの良いところは、視覚情報を取っ掛かりに欲しい情報を手繰れる点がポイントだと思います。特にハッシュタグから海外の投稿をたくさん見ることができ、「これが知りたかった！」に直結するところが魅力的です。まるでプロが撮影したかのような画像と動画がいっぱいで、隙間時間に流しで見るはずが、あっという間に時間が…なんてことも。また Facebook の方は、若年層はもとより 50 代以上の登録と利用が多いことを知り、投稿を同期することで両方へのアプローチになることを期待しています。

HP とパンフレットのリニューアル

偶然にも両方とも更新のタイミングで、結果的に同時リニューアルとなりました。HP は従来のフォーマルなイメージから親しみやすさに重点を置き、「なにをしている団体なのか」が伝わりやすい画像に変更しました。パンフレット内の画像も増やし、年表にも文化財に関する災害などを付け加え見やすく整理しました。この 2 つはスタッフの久下さんと森田さんが活躍！膨大な画像類からの選抜、さぞや大変だったと思います。

SNS 開設の反応は？

始めてからまだ日が浅く、ご存知でない方も多いかもかもしれません。投稿頻度も多いとは言えませんが、業者の解析によるとジワリジワリとフォロワー数が増えていると聞いて喜びでいっぱいです。「いいね！」や「フォローしました！」の反応が励みになっています！実際は「何がいいかな…」「今週のネタ…」と頭をひねりながら、ほかのスタッフを交えつつ頑張っています。会員の皆さんの反応を取り入れながら作っていきたいです！



令和 3 年度 JCP セミナー「文化財保存修復を目指す人のための実践コース」

予
告

今年度のテーマは「文化財の総合的診断管理講座」。今必要とされている日常の文化財危機管理について、IPM を中心にプログラムを組み立てる予定です。昨年度に引き続き基本的にリモート配信で行いますが、対面でのワークショップも何とか取り入れられればと思っています。詳細決まり次第 HP、SNS などで告知していきますので、是非ご期待ください。

令和 2 年度

特集
Ⅲ

文化財保存修復を目指す人のための実践コース 被災した文化財の第一次レスキュー（水損資料を中心に） ～リモート配信の取り組み～

JCP のセミナーは、東京国立博物館文化財保存修復課のご協力を得て、2008 年にスタート。以来毎年対面による講義と現場研修を中心に展開してきました。そこへ今回のコロナ禍、一時は中止も考えました。しかし今回のテーマはタイムリーな被災資料のレスキューについて。心待ちにして下さる方々も増えており、何としても実行しなければ、と、リモートでの開催を決意しました。

決意するのは簡単でも、実行するのは大変です。今回は川崎市市民ミュージアムの全面的なご協力でロケも行わせて頂き、11 月から 2 月半ばまでの配信期間で 85 名の方が受講、好評裡に終了することができました。これもひとえに動画撮影に果敢にチャレンジして下さった講師、そしてそれを支えたスタッフの奮闘があってこそです。今回はスタッフと講師から苦労話の一端をお届けしたいと思います。

森田 早織 セミナースタッフ（当時）
（NPOJCP 登録会員／絵画模写制作・保存修復家）

2020 年は新型コロナウイルス感染症の影響により、自粛や三密を避けるなどの新しい生活様式が始まりました。そんな中、NPOJCP では毎年恒例の『文化財保存修復を目指す人のための実践コース』をオンライン講座という形で例年通り開催することになりました。しかし、JCP でもはじめての試み。配信方法や講義の収録、動画編集など、一から調べて作り上げることになりました。

私は主に事務局内での講義の収録、動画編集、配信を担当しました。

講義の撮影では、コロナ感染予防対策を徹底しながら収録する必要がありました。そこで、JCP スタッフの最小人数で対応し、収録場所は JCP の新工房、ご講義いただく先生とは一定の距離をとっての撮影となりました。パワーポイントでの講義が多かったため、15 分毎に休憩をとりながら 1 時間の講義を収録しました。さすが慣れていらっしゃる先生達ばかりで、撮り直し

もほとんどなく、スムーズに撮影を終えることができました。

さらに、これらの収録映像を配信用の動画へと編集していきました。さまざまな動画編集ソフトがあるなか、Mac と Windows に対応し、素人でも編集しやすく、仕上がりの良いソフト。尚且つ、スタッフがリモート業務に対応でき、外部委託の際にも汎用性があるソフトを選んで使用しました。ただ、大量の動画を編集するために、高スペックのパソコンを急遽入手しなければならぬという一面もありました。

今回の収録・編集・配信等については、色々な方から助言を頂きながらスタッフが試行錯誤して作り上げました。このような経験は、私達 JCP スタッフだけではなく、多くの方々がこのコロナ禍でご経験、ご苦労をされたのではないのでしょうか。これからはオンデマンドやオンライン授業がスタンダードになってくる時代になりつつあります。しかし、受講者の方からは「また対面もおこなってほしい」という声もいただきました。今後も、両方の環境をうまく反映しつつ、より良い実践セミナーになっていけたらな、と思う編集スタッフでした。

| 収 録

白岩洋子先生収録



池田和彦先生収録



増村英二先生収録

久下 有貴 セミナースタッフ（当時）
（NPOJCP 登録会員／画家、東洋絵画模写・修復）

そうですね。私は更に細かい裏話をさせていただきます。いろいろ試行錯誤したのだなと思っていただけたら幸いです。

配信媒体については無知で、漠然と You Tube でいけるのかな？と考えていました。いざ規約などを調べていると、実践コースの方向性とは異なる点が多々あることがわかり、受講者のユーザー管理ができることが前提にあったため、その後、事務局長が調べたプラットフォーム（クラストリーム）を活用することに至りました。とても便利で使い勝手が良かったです。

収録において、私は川崎市市民ミュージアム現地での撮影に何回か赴きました。最初、川崎市市民ミュージアムでは、収録を事務局スタッフがやると思っていなかったようです。ネットで動画撮影方法などを調べたところ、普段使っているノート PC、ハンディカム、ボイスレコーダーでほとんど機材は賄えました。自身も登録会員としてレスキューへ参加していたので、収録時に先生の講義を聴きながら、レスキュー内容を再度理解し復習するような感じでカメラを回していました。現場での撮影は、パワーポイントの講義だけでなく、実際に使用した資材や道具を使って実演したり、調査

方法の紹介を撮影したので、視聴者に臨場感を味わってもらえるよう、カメラを持って動き回るような感じでした。

余談ですが、途中で私の靴が脱げて、そのままカメラで先生の動きを追いかけていた様子が周りにいるスタッフにバレて写真を撮られていました。。

編集では、初心者でも扱うことのできる動画ソフトがあるからこそできました！副業に動画編集が増えているのも納得…。

今回、なぜ私達が編集も行ったか。一部は委託する部分もありました。一番は専門的な内容であることが大きな理由です。特に実演が多い先生では、その意図を汲み取りながら編集できたことはとても良かったと思っています。

編集にも一つ余談があります。稀にある先生の言い直しの部分を編集するため、確認しやすいよう、収録時に先生の言い直しが収録開始から何分後にあるか、撮影しながらメモしていました。むしろ、聞き逃さないよう集中してメモをとる。なんとなく申し訳ない気持ちでいたのを思い出しました（苦笑）。

思い返すと全てが新鮮で、模索続きでしたが、配信が始まってからは特に大きな問題や問い合わせはなかったようで、本当に何よりでした。ありがとうございました。

裏 話

貝塚建先生収録



三浦功美子先生のお話

講義動画を作る際に特に難しかったのは、目の前に人がいないので受講者の反応がイメージできない点でした。対面であれば、わかりにくい点は繰り返して説明することもしますが、動画でそれをやると逆にわかりにくくなりそうでもあり、結果、原稿の棒読みになってしまって、それが受講者にとって理解しやすかったのかどうか不安です。大学でもリモート授業を行いました、授業はリアルタイムで行うので学生たちに質問を投げかけることができます。事前録画だとそれもできず、一方通行になってしまって、予想していたより短い時間で収録が終わってしまいました。

また、動画を撮影した時点ではどのような人が参加してくるのがまだわからなかったので参加者のレベルがつかめず、ある程度一般向けに話すのか、専門性をもって話すのかを絞るのも難しかったです。今回の動画は修復技術者対象というより学芸員などに向けて話をするイメージで作り込んだので、修復の専門家には物足りなかったかもしれません。

動画の中で使った屏風や額の見本は、普段は見えないけれども修復する上で大事な部分が見えやすいように作成したもので、学校の教材として使ったり展示に使ったりしています。作品の内部構造については言葉で説明するよりも見た方が早いので、リモートでもご好評いただきました。

2 回目の講義（「記録取り、調査の手順、留意点」）では、日常的にやっている調査について、何故、どのように作業しているのかを組み立てるのに時間がかかりましたが、改めて考える機会になりました。

(NPOJCP 登録会員／伝世舎)



セミナー

一宮佳世子先生のお話

この度は機能紙と不織布をテーマにとお声がけいただき、高知県の良い宣伝になればという思いから及ばずながら講義を担当しました。

とはいえ講義動画の作成は初めての経験でしたので、困ったときの Google 先生で、まずは「リモート講義動画の作り方」をネットで検索するところから始めました。すると YouTube で作り方を一からこと細かに教えてくれる動画がたくさん見つかり、特別な機材はなくてもパワーポイントだけで作成できることがわかりました。あとは YouTube 動画の説明に従ってスライドを作り、自分の姿と音声を入れワイプで見えるよう設定しました。カメラ撮影にはかなり抵抗がありましたが、対面ではないぶん、小さくてもたとえ徹夜明けのやつれた姿でも顔が出ている方がよいのではと考え勇気を出しました。飽きがこないよう画面をなるべくカラフルにし、そして写真や動画も各企業の HP から拝借してたくさん使用しました。音声の調整に少々不備があったこと、話が一方的で受講生全員のご期待に沿えるまでの内容にできなかったことは悔やまれますが、それでも何とか形にしてお届けできたことは自分にとっても大変良い経験となりました。高知県立紙産業技術センターには有吉氏によるアドバイスや SEM 分析など全面的なサポートにお礼申し上げます。機会を与えてくださった JCP とご視聴くださった受講生の皆さまもありがとうございました。事前にお配りした不織布のサンプルもご好評いただき何よりでした。

(NPOJCP 登録会員／いの町紙の博物館非常勤専門職員)



増村英二先生のお話～レスキュー活動開始から今日まで

2019年10月、1本の電話から開始されたレスキュー活動。収蔵庫にある作品の搬出からスタートし、その後救援活動に参加された専門家の方々と意見交換や助言を頂きながら、今我々ができる事は何かを考え、作品を一時保管できる箱の設計から製作、それを活用したレスキュー活動を行いました。あれから1年半の歳月が経過し、被災当初は見るたびに心が痛んでいた作品も、専門家の懸命かつ地道な修復作業により、徐々に息を吹き返し始めました。ただ、修復作業はまだ始まったばかりです。

昨年度、本活動において作成した箱など取り組み内容について、セミナーで説明させていただく機会がありました。正直なところセミナーに参加した皆さんがどういった反応をされるのか全く未知数でした。結果として多くの方から好意的な感想をいただき、ほっとすると共に緊急時における具体的な対応策について、知見を必要としている方が多くいらっしゃる事が分かりました。一連のレスキュー活動で培った経験、そして多くの専門家の方々に頂いた知識は、将来起こるであろう大災害に対する備え、防災、減災に役立てるため、未来に継承していきます。そして、これから第二のアーカイブを刻んでいく修復された作品と向き合い、専門家の意見をふまえ安全かつ最適な保管箱等の提案を継続していきたいと思っています。



(ヤマト運輸株式会社
グローバル SCM 美術品輸送課)



師のお話

オンラインセミナーへの反響と今後の課題

松田 佳代(事務局スタッフ)

JCP初のオンライン配信では、「著作権はどうなる?」「出欠はどうやって確認すれば?」「セキュリティ対策は?」等々、過去のセミナーと違うことばかりで動画編集担当以外のスタッフもドキドキしっぱなしでした。

アンケート結果では配信自体は好評で、「何度でも視聴できるのが良い」「場所や時間を選ばず受講できて助かる」というお声をたくさんいただきました。休みを取りにくい方や遠方からのご参加が増え、なんと海外から参加してくださった方もいらっしゃいます。場所を選ばない広がりにはオンライン最大のメリットかもしれません。

反省点としては、「アンケートがわかりにくい」。すみません。Google フォームを使ってみたのですが、講義ごとではリンク先が多すぎるかと配信期間ごとにまとめたら逆にわかりにくくなってしまい…次回は改善します。「動画が固まってしまった・聞き取りにくかった」という事象については収録時の機材の調子や視聴環境にもよるので限界がありますが、「日程を忘れて見逃してしまった」というご意見については配信開始が近づいたタイミングで受講者にメールを差し上げることで改善できるのではと思っています。

そして、「先生や他の参加者と直接、双方向でお話をしたい」。今年度のセミナーもオンライン配信になる予定ですが、オンラインのメリットを活かしつつ、実地でワークショップなどもできると良いですね。

令和2年度
文化財保存修復を目指す人のための実践コース
～被災した文化財の第一次レスキュー
(水損資料を中心に)～

主催：特定非営利活動法人 文化財保存支援機構
共催：独立行政法人国立文化財機構 東京国立博物館
協力：独立行政法人国立文化財機構 / 川崎市・川崎市市民ミュージアム / 一般社団法人 全国美術館会議 / 一般社団法人 国宝修理装演師連盟
後援：公益財団法人 文化財保護・芸術研究助成財団 / 公益財団法人 日本博物館協会 / 一般社団法人 文化財保存修復学会 / 文化遺産国際協力コンソーシアム

監修：三輪嘉六 (NPOJCP 理事長)
増田勝彦 (NPOJCP 理事)

配信期間：令和2年11月2日～令和3年2月14日
(全4コース)

受講者数：85名

※詳細は令和2年度「文化財保存修復を目指す人のための実践コース」実施報告書に掲載されています。ご希望の方は本部事務局までお問い合わせください。

ご入会ありがとうございました。

(令和3年6月15日現在入会者数)

■ 理事	8名
■ 維持会員	16名
■ 登録会員	148名
■ 一般会員	100名
■ 学生会員	18名
■ 監事	1名
■ 評議員	1名
■ 賛助会員	23件

株式会社 宇佐美修徳堂

株式会社 岡墨光堂

株式会社 桂文化財修理工房

京都芸術大学 日本庭園・歴史遺産研究センター

國富株式会社 九州統括本部

株式会社 光影堂

一般社団法人 国宝修理装こう師連盟

コネクト株式会社

修理工房 宰匠株式会社

株式会社 坂田墨珠堂

株式会社 松鶴堂

株式会社 修護

株式会社 修美

中部資材株式会社

株式会社 東都文化財保存研究所

株式会社 トリアド工房

長谷川和紙工房

株式会社 半田九清堂

株式会社 文化財保存

山領絵画修復工房

株式会社 リボテック

他 個人2名 (アイウエオ順)

ご寄付をありがとうございました。

(令和元年度・令和2年度)

NPO 法人 住みよい地域づくり推進協議会 様

タイムトラベル専門書店 utouto 様

伝世舎 様

土師絵画工房 様

個人 3名様

NPO JCP の活動に

参加してみませんか？

■登録会員：年会費 7,000 円

文化財保存に関わる専門的スキルを持ち、プロジェクト遂行に協力する個人。

登録会員は文化財の保存事業を行うための専門家で、文化財に直接関わる専門家とは限りません。

■一般会員：年会費 5,000 円

この法人の目的に賛同し、支援する団体、個人。

■学生会員：年会費 3,000 円

大学または大学院に相当もしくは準じる教育機関の学籍を持ち、この法人の目的に賛同して入会する個人。

□会員特典：情報誌の送付

講演会／研修会等への優先参加

※入会ご希望の方は、ファックス、電話、メールにて申込用紙をご請求ください。折り返し資料をお送りいたします。また、ホームページからでも入会申込ができます。

TEL：03-3821-3264 / FAX：03-3821-3265

E-mail：jimukyoku@jcpnp.org / URL：www.jcpnp.org

※ JCP では、随時寄附を受け付けております。

下記の郵便振替、あるいは銀行口座をご利用ください。

・郵便振替 00120-4-10545

NPOJCP

・三菱東京 UFJ 銀行 四谷三丁目支店

普通預金 3960340

特定非営利活動法人 文化財保存支援機構

理事 三輪嘉六

・みずほ銀行 根津支店

普通預金 1727893

特定非営利活動法人 文化財保存支援機構



特定非営利活動法人
文化財保存支援機構

NPO JCP NEWS vol.36

2021 年 6 月 30 日発行

事務所所在地

本部

〒110-0008

台東区池之端 4-14-8 ビューハイツ池之端 102 号

TEL：03-3821-3264 FAX：03-3821-3265

E-mail：jimukyoku@jcpnp.org URL：www.jcpnp.org

関西支部

京都芸術大学 日本庭園・歴史遺産研究センター内

TEL：075-791-8519

九州支部

〒810-0011

福岡県福岡市中央区高砂 2-6-10 セントラルステイツ 301 号

TEL：092-791-5663 / E-mail：kyushushibu@jcpnp.org

編集 後記

八木) コロナの影響で?? 1 年半ぶりの発行です。さすがに今回から表紙の「季刊誌」を取りました。「季刊」は永遠の目標です。

本) 初めて 1 ページまかされましたが、自分の文章力の衰えに危機感を覚えました。これも SNS の影響でしょうか…回を重ねるごとにブラッシュアップできるようトレーニングしたいと思います。

久下) オンラインセミナー 1 年目立ち上げというレアな経験をさせていただきました。編集しながら思い出していました。昨年度をもって事務局スタッフを離れましたが、登録会員やその他プロジェクトではまたお世話になるかと思います。ありがとうございました！

松田) 最近、事務室の大整理が始まっています。立ち上げから 20 年が経ち、書類も刊行物も増えました。面積は変えられないので収納方法の見直し、動線の見直し、わかりやすい配置…皆様への発送作業もよりスムーズにできるようにしていきたいと思っています。

高橋) 一昨年、レスキュー事業に初めて参加させていただきました。10 年前の当日のことを今でも覚えています。当時は文化財分野に関わりも興味もない中学生だったので、月日の流れは不思議だと思います。自分にもできることがあるのであれば、頑張りたいです。